

【農業水利施設の魅力を知ってほしい (No.19) ; 渡来人によって整備された葛野大堰 (2024 年 11 月)】

わが国の歴史を振り返ると、奈良時代や平安時代には遣隋使や遣唐使を大陸に派遣して、様々な技術を持ち帰っていた。かんがい技術でも、渡来人の影響は大きかったと考えられる。今回は、京都市の桂川右岸を受益とする洛西用水 (図 1) に着目する。

松本 (2006) によれば、古代において京都盆地の開発に大きな足跡を残したのは 5 世紀末に朝鮮半島から渡来した高度な土木技術を有する秦氏であった。秦氏によって平安遷都以前に桂川に堰が築かれた。現在は一の井堰と呼ばれる葛野大堰で取水された用水路『一の井 (現在は洛西用水とも)』は秦氏の氏神である松尾大社の境内を流れ、784 年に造営された長岡京があった現在の長岡京市や向日市近くまで受益地となっている。

今回は洛西用水に着目して農業水利施設の魅力を紹介したい。なお文中の地図は、地理院タイルに写真位置番号等を追記して掲載したものである。

引用 : 松本精一 (2006) : 温情義気-現代の桂川、農土誌、74 (12)、1140-1141

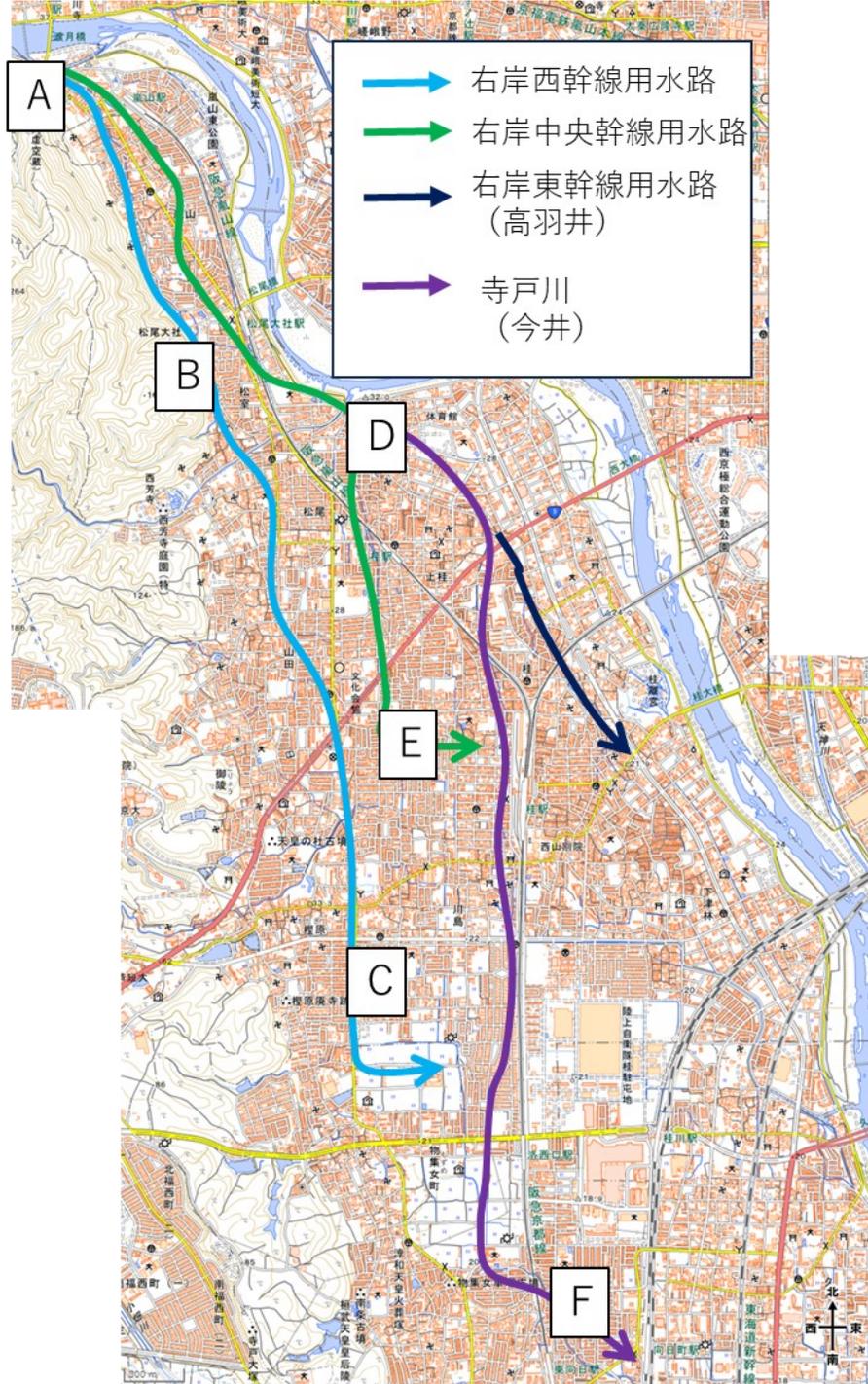


図1 洛西用水

A：一の井堰

京都の著名観光地である嵐山。桂川に架かる渡月橋に沿うような形で一の井堰（写真1）がある。阪急嵐山駅付近では、右岸西幹線用水（写真2）とそれ以外の系統（写真3）に分かれる。



写真1 一の井堰



写真2 阪急嵐山駅付近の右岸西幹線用水



写真3 阪急嵐山駅付近の西幹線用水以外の系統

B：右岸西幹線用水路（松尾大社付近）

右岸西幹線用水は松尾山の山裾に沿うように流下していく。阪急松尾大社駅付近に至ると、秦氏の氏神である松尾大社の境内を通過する（写真4）。



写真4 松尾大社境内を流れる洛西用水

C：右岸西幹線用水路（洛西口駅付近）

松尾大社から先は、用水路がところどころ暗渠になったり、住宅の裏手を通過したりと、なかなか並走することが困難となる。阪急洛西口駅近くになると西国街道沿いに用水路と並走する（写真5）。その先にまとまった農地があり、用水路は受益地へと流れを変える（写真6）。



写真5 右岸西幹線用水末端部分その1



写真6 右岸西幹線用水末端部分その2

D：円筒分水工付近

写真3の系統に沿って30分ほど進むと、写真7の円筒分水工に至る。ここで右岸中央幹線用水路と右岸東幹線用水路に分かれるようである。今回は右岸中央幹線用水路を進む。



写真7 松室吾田神町地先の円筒分水工

E：右岸中央幹線用水路（桂駅付近）

阪急桂駅付近まで来ると、右岸中央幹線用水路の末端部分となる。写真9のように用水路に小河川が流入するような箇所もある。その先で写真10のように、やや水路幅が広くなり、最終的には寺戸川に合流する。

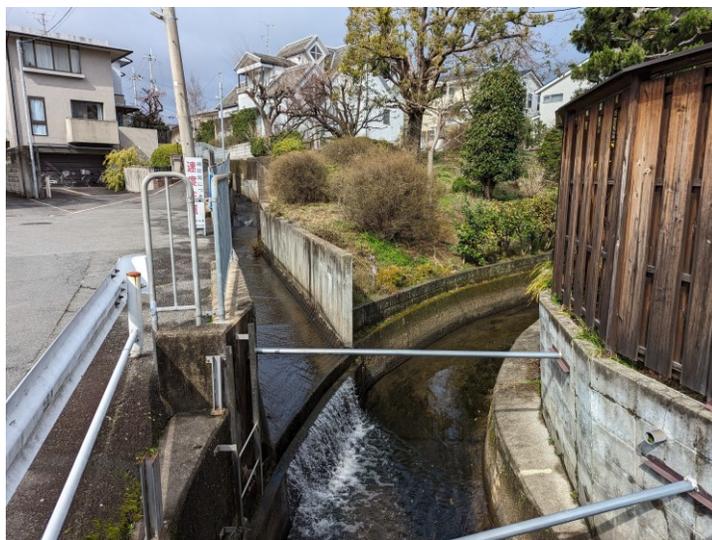


写真9 阪急桂駅西側の右岸中央幹線用水路その1



写真10 阪急桂駅西側の右岸中央幹線用水路その2

F：寺戸川

向日市（2020）によれば、洛西用水最末端の受益地となる向日市内を流れる寺戸川は、中世桂川今井用水の本流とされる。寺戸川は右岸西幹線用水路、右岸中央幹線用水路の受益地の排水を承ける形にもなっている。上流の受益地の排水を反復利用するように、最末端の向日市の受益地では、農地への分水工（写真 11）が設けられつつ、桂川に向けて流下する（写真 12）。

引用文献：向日市（2020）：向日市歴史的風致維持向上計画第 2 章 4 節、

https://www.city.muko.kyoto.jp/ikkrwebBrowse/material/files/group/43/R2rekimachi_4_2_4.pdf



写真 11 寺戸川その 1



写真 12 寺戸川その 2

余談：上賀茂社家町と明神川

京都市の上賀茂神社近くには明神川という、大変気持ちよく歩ける水路がある。重要伝統的建造物群保存地区「上賀茂」に指定される地域を流下する水路は、「・・・室町時代から上賀茂神社の神官の屋敷町として町並みが形成されてきたところである。明治維新までの旧集落は、上賀茂神社の神官（社司と氏人）と農民が集住する特殊な性格を持つ集落であった。そこで一般に社家町とよばれるようになった。明治以後は京都の近郊農村的性格を徐々に強め、社家町の性格は薄らいでいった。しかし、ここ明神川沿いには今日も社家が旧来のまま連担し、他所で滅びた貴重な社家町が清々しく残っている。（京都市（2024）」とされるように京都らしい水路景観を醸し出している。



図2 明神川



写真13 明神川 a



写真 14 明神川 b



写真 15 明神川 c